
 学 会 記 事

第7回 DIC 研究会

日 時 平成12年7月7日(金)
午後6:30より
会 場 新潟東映ホテル 1階
白鳥の間

I. 一 般 演 題

1) ヘパリン誘発性血小板減少症を来した術後肺塞栓の一例

相田 浩	・大木 泉
藤田 和之	・富田 雅俊
田村 希	・三井 卓弥
佐々木 将	・小島 由美
菊池真理子	・松下 宏
佐藤 孝明	・加勢 宏明
常木郁之輔	・倉田 仁
青木 陽一	・田中 憲一
	(新潟大学)
	(産婦人科)
那須野暁光	(同)
	(第一内科)
名村 理	・榛沢 和彦
諸 久永	(同)
	(第二外科)

ヘパリンは術後血栓予防に有効とされているが、長期投与の際の注意すべき副作用としてヘパリン誘発性血小板減少症(HIT)が報告されている。今回、術後肺塞栓に対し抗凝固療法として使用したヘパリンにより HIT を来した症例を経験したので報告する。

症例：S.Y. 45才女性。既婚。0妊。身長153cm、体重109kgと高度の肥満、精神発達遅滞あるも、その他に合併症なし。子宮体癌の診断にて平成12年2月14日根治術施行。血栓予防のため術中より足底刺激装置(AVインパルス)を使用。術後ヘパリンを15,000単位/日連日持続点滴静注投与。術後4日目に歩行を開始しヘパリンおよびAVインパルスを中止。術後6日目左下肢疼痛、軽度発赤を認めたため、下肢静脈血栓症を疑いヘパリンを再開。同夜排便後、血圧低下、口唇チアノーゼ、胸痛出現。肺血流シンチにて右肺上葉、左肺下葉に欠損像あり肺塞栓と診断。また超音波断層法にてIVHのカテーテル先端に血栓を認めたため、ヘパリン増量およびウロキナーゼ大量投与による血栓溶解療法施行。全身状

態は回復に向かっていたが、肺塞栓発症後4病日目、血小板の急激な減少あり、HITを疑いヘパリンを中止。翌日、血栓が急激に増大してきたため全身麻酔下に右内頸静脈を切開し、血栓と共にIVHカテーテルを抜去。術中よりアルガトロバンによる抗凝固療法を開始。9病日目より減量中止し、内服による抗凝固療法に変更。血栓症の増悪なく21病日目に退院。

ヘパリンの長期投与例や透析患者で稀に血小板減少および血栓の増悪を来すHITを発症することが報告されている。HITの病態はヘパリンと血小板第4因子(PF4)の複合体に対する免疫反応であり、早期の診断によるヘパリンの中止およびアルガトロバンなどのヘパリンと交差反応性を呈しない抗凝固療法を行わなければ急激な転帰をたどる予後不良な疾患である。

2) インフルエンザ関連性脳症の一部は septic encephalopathy か?

渡辺 徹	・阿部 時也	(新潟市民病院)
小田 良彦		(小児科)
岡崎 悦夫		(同)
		(臨床病理部)

【目的】日本においてインフルエンザ関連性脳炎・脳症の多発が報告されているが、その発症機序は不明である。またDICを合併した本症は予後不良といわれている。今回我々は、急激な経過で死亡したインフルエンザA感染症の1例を経験し、sepsisの観点からその発症機序を検討したので報告する。

【症例】2才の男児。発熱が出現した24時間後にけいれん、意識障害を生じ、当科に転送された。肝機能障害、腎機能障害、DICを認め、循環不全により入院後4時間で死亡した。

【方法】剖検組織の病理学的検討、保存組織、血清、髄液を用いたRT-PCR法によるインフルエンザウイルスの検索、サイトカインおよび可溶性因子の検討を行った。

【結果】1)病理学的検討：脳浮腫および脳血管内皮へのマクロファージの接着像、T細胞浸潤による間質性肺炎、骨髄における著明な血球貪食成熟組織球浸潤を認めた。2)ウイルス学的検討：髄液、肺より、インフルエンザAH3が検出された。脳からは検出されなかった。3)サイトカイン等の検討：血清TNF- α (748 pg/ml)、IL-6 (4,500 pg/ml)の上昇、髄液TNF- α (18.7 pg/ml)、IL-6 (4,130 pg/ml)、ネオプテリ